

豊かに読み取らせる説明文の指導

～書く活動を取り入れた読みの指導を通して～

目 次

I	研究テーマ設定理由	45
II	研究仮説	45
III	研究内容	46
1	研究テーマの構想	46
(1)	新しい学力観に基づく国語科の指導	46
(2)	「豊かに読み取らせる説明文の指導」の考え方	46
(3)	「豊かに読み取らせる説明文の指導」の構造	47
2	「豊かに読み取らせる説明文の指導」の指導内容	48
(1)	「豊かに読み取らせる説明文の指導」における 書く活動を取り入れた読みの指導について	48
(2)	「豊かに読み取らせる説明文の指導」の視点にたった書く活動	49
(3)	書くのさまざまな機能から取り入れる書く活動	51
IV	授業実践	55
1	単元名	55
2	単元について	55
3	単元の目標	55
4	指導計画	55
5	児童の実態	56
6	本単元における豊かに読み取らせる指導の手だて	57
7	おもな指導事項	58
8	教材研究	58
(1)	指導的研究	58
(2)	言語表現形式(教材分析)	59
(3)	教材研究(尾括型の文章構成)	60
9	授業実践の記録	61
V	研究のまとめと今後の課題	65
	<主な参考・引用文献>	66

浦添市立神森小学校教諭

宮 城 克 枝

豊かに読み取らせる説明文の指導

～書く活動を取り入れた読みの指導を通して～

浦添市立神森小学校 宮城克枝

I テーマ設定理由

子どもたちのまわりには、活字になった新聞や雑誌、参考書などの情報があふれている。その情報の大部分は説明文である。プラモデルの作り方や、生活をする上で必要に迫られて読む文章、例えば電気製品の注意書き、薬の効能書き等もすべて説明文である。したがって、このような情報化社会に対応できる子どもたちを育てるために、説明文の指導は大切である。

学習指導要領の改訂により、国語科の目標として

「国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」

とある。そのため、「表現」「理解」の領域に分け、この2つを関連させ、それに、言語事項の指導が入るようになってきている。それゆえ、国語科に強く求められたのは、適切な表現力、正確な理解力特に文章表現力の向上が強調されている。

「表現する」に関しては、国語科だけでなく他教科においても発展学習などでも取り上げられており、また、情報化社会になり内容を精選したり自己を表現したりする力は不可欠なものと考えられる。それゆえ、国語科の学習が重要視されその中でも表現する能力（表現活動）が大切になってきている。この表現活動を行うにもやはりほとんどが説明文で表現されるものである。自分の考えを発表するとき、調べ学習で資料をまとめたりするときなどそうである。

ところが、本県・本市・本校の達成度テスト等における説明文の問題の正答率はひくいのである。指示語・接続語の使われ方の理解がされていない、要点・要旨がとらえられていないなどの問題点が上げられ、説明文の指導の見直しや工夫が必要であることがわかる。

そこで、時代の要請と実態を考え、さらに本校の教育目標「心豊かな人間の育成」をめざし、本テーマを「豊かに読み取らせる説明文の指導」とした。

豊かに読み取らせるには、まず、文章を正確に読み取らなければならない。そのためには文章を読み取るための基礎的・基本的事項の定着が必要である。またそこには、思考をはたかせ自分の意見や感想をもちながら読むことである。そのため、自分の考えを確かにするために書きとめることが必要になってくる。そこで、説明文の指導においてこれまでの指導の上にさらに書く活動を取り入れた読みの指導を位置づけることにより、確かに読み取らせ、豊かに読み取らせていきたい。

II 研究仮説

学習過程の中で書く活動を取り入れた読みの指導を位置づけることにより、一人ひとりが自分のイメージや思考を広げたり、深めたりすることができれば、豊かな読みの力が育つであろう。

Ⅲ 研究内容

1 研究テーマの構想

(1) 新しい学力観に基づく国語科の指導

「新しい学力」における国語科の学習指導は、子どもがさまざまな社会の変化に直面しても、それに主体的に対応できるよう、目的や意図に応じて適切に表現する能力と、相手の立場や考えを的確に理解する能力を育成するとともに、思考力や想像力および言語感覚を養うことが大切であるとされている。

そのため、新しい国語科授業の創造を図るには、子どもが自ら進んで考え、判断し、表現及び行動できる豊かで創造的な資質や能力を学力の基本とすることである。それゆえ、子どもの側に立って、個に応じ個を伸ばす学習指導を構想・構築し展開することを考えていかなければならない。

<指導のポイント>

- ① 個性を尊重する。
- ② 主体的な学習をする。
- ③ 教材研究を改善する。
- ④ 既習の学習を生かす。
- ⑤ 指導としての評価をする。

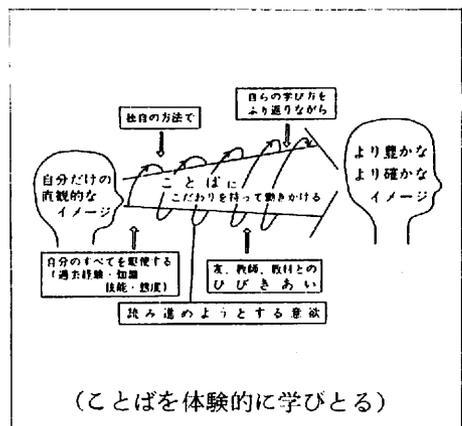
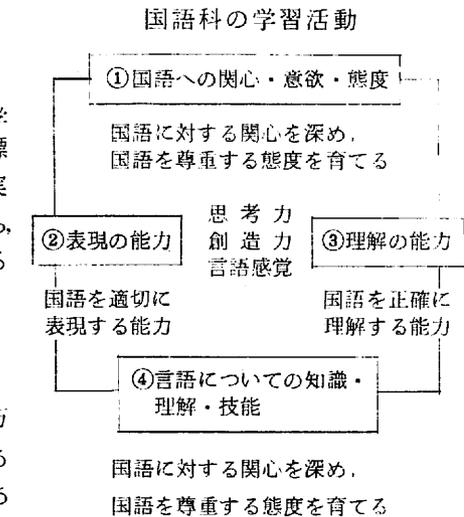
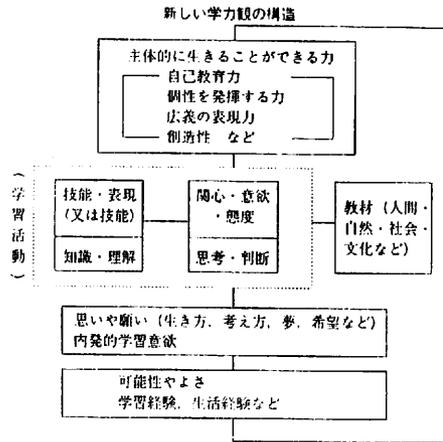
上記の「新しい学力観」国語科の目標に基づき、児童の実態・時代の要請から、説明文を取り上げることにした。

(2) 「豊かに読み取らせる説明文の指導」の考え方

「豊かな読み」というと物語文のイメージがあり、説明文では「確かな読み」ととらえがちである。しかし、説明文でも内容によっては「豊かな読み」が必要であり、物語文でも「確かな読み」が必要である。つまり、本来は両方の読みがなければ「正しい読み」にならないと考えられる。この2つの読みはペアである。

「豊かな読み」は、文脈に即した「確かな読み」から生まれる。不足がなく十分に内容を読み取るには、1字1句にこだわる、はっきりした読み取りが必要である。

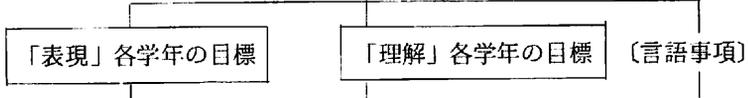
よって、そこに書く活動を取り入れ「確かな読み」・「豊かな読み」から、「豊かな読み」・「発展的な読み」へつなげたい。



(3) 「豊かに読み取らせる説明文」の指導過程の構造

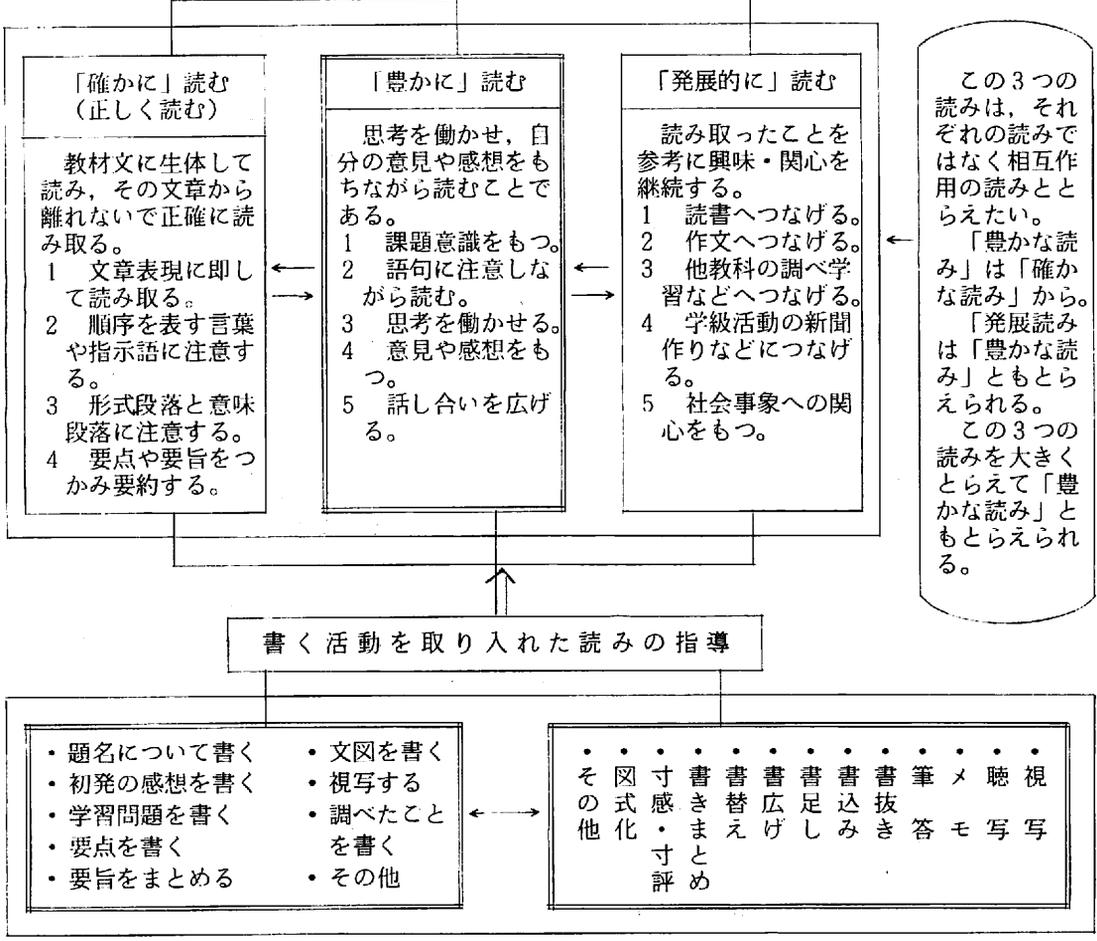
国語科の目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。



説明文の目標

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
事柄の大体を表現し理解する	事柄の順序を表現し理解する	内容の要点を表現し理解する	内容の中心点をはっきりさせて表現し理解する	主題や要旨をはっきりさせて表現し理解する	目的や内容にふさわしい表現をそれに応じて理解する



2 「豊かに読み取らせる説明文」の指導内容

(1) 説明文の学習における書く活動を取り入れた読みの指導について

① 読みの指導

一人ひとりの子どもが文章を読む喜びを体験し、主体的な読み手となって学習するその学習の過程で、国語の基礎的技能や基礎的能力が確実に定着し、確かに豊かな読みの力が身についていくと考える。

文章を読むということは、文字、語句が読めるということから、書かれている内容を理解して分かるということまでの意味をもっている。内容を正確に読み取るためには、一字一語の重みや言葉の使い方の相違などにも注意しながら確かに読む。つまり、文章を叙述に即して正確に読み取ることである。

文字による表記を目で正しく認知し、語句と語句の関係や文と文との結びつきを考えながら、あるいは意味づけながら文章の意味を理解する。さらに理解した内容に関連することがらについて知りたいと思ったり、説明不足と思われるようなことがらについて他の文章で調べたり、同じ筆者の他の説明文を読んでみようとする。

この発展的な読みができるということは、読み手が文章を確かに読んでいることの証でもあるが、豊かな読みは他から与えられるものではなく、読み手自身が思いや考えを文章の内容につけ加えていくことによって生まれてくるものである。

子どもの知的欲求を満たし、新しい認識を得る喜びを味わわせることが確かに豊かな読みにつながる。そして、このことが言語能力の育成やよりよい人間形成の育成にもつながる。

② 書くことの指導

これまでの読みの学習のなかに書く活動を取り入れること、読むことの指導と関連した書くことの指導の大切さが強調されてきている。読みを確かにするためにも、書く活動を読む活動のなかに生かさなければならない。また、「書くこと」は「作文」というように、書くことの意味をせまくとらえるのではなく、書きながら読み、読みながら書く、読みの活動を身につけさせたいものである。

確かに読む力や豊かに読む力は、もちろん読む活動を通して養われることはいうまでもないが、読む活動のなかに書くことを取り入れることにより、さらに効果的な読みができると考える。話し合い中心の授業を脱して学習の多様化を図り、多くの時間を費やす読解学習の中核に書く活動を位置づけたい。それゆえ、1時間の授業のなかに書く活動を意識して位置づけ、その活動をいろいろ工夫したい。

このように書く活動や書く場があることで自問自答し、自分で書いたことがらを起点として読みが確かになる。さらに、個々の子どもの感情や意欲を大切にすることにもつながり、豊かな読みにつながることになる。

また、文章を読む喜びを経験することで豊かな読書生活が生まれる。そして、このことが「文章を読んで理解したこと、感動したことを言語を通して表現し価値ある言語表現が自力のできる子どもの育成」や「良き読書人の育成」につなげたい。

③ 書く活動を取り入れた読みの指導のメリット

- | | |
|---|----------------------------------|
| ア | 子どもたち全員を、容易にその学習へ参加させることができる。 |
| イ | 子どもたちを学習に集中させ、没入させることができる。 |
| ウ | 確かに読む、深く読む、想像を広げて読む、などの学習が確保できる。 |
| エ | 学習の経験が累積できる。 |
| オ | 子どもの学習に個性化が期待できる。 |

(2) 豊かに読み取らせる説明文指導の視点に立つ書く活動

	目標	説明文指導の視点	書く活動の例
一 学 年	事柄の大体を表現し理解する。	① 読みのめあてを一人ひとり持たせる。 ② 読みの成立を図る。 ③ さし絵や写真、実物などの活用を図り、読みの充実役に立てる。 ④ 音読をする。……正しい読み 暗唱	・初発の感想……カード・絵 ・サイドライン・印・マーク・色分け ・ワークシートの活用 ・虫くい・吹き出し・絵・表 ・視写する ・他の題材で説明文を書く
二 学 年	事柄の順序を表現し理解する。	① 興味・関心を満足させる読みをさせる。 ・教材を知る ・叙述や表現に着目させる ・感動を大切にさせる ② 読み取り方を身につけて読ませる。 ・まとまりごとに読ませる。 ③ 読み深め、読み広げをさせる。	・書かれている教材について、他の文献で調べたりする。 ・文章構成・指示語・接続語・語句・比喻表現をかく。 ・自分の経験・体験を書く。 ・自分の感じたこと・考えたことを書く。 ・筆者の思い・考えを書く。
三 学 年	内容の要点を表現し理解する。	① 読み取り方を身につけさせる。 ② 自己を通させる。 (個別化・個性化) ③ 感覚的な読みをさせる。 ④ 表現の工夫を読ませる。 ・要点をとらえる方法の重点 「どういう考えでその要点にしたのか」考えの道筋をはっきりさせる。	・学習課題↔ひとり読み・ひとり調べ↔集団思考・共同思考。 ・視写や聴写をさせ、大事なことを読み落とさない。 ・1語1語、1文1文、全体構成など筆者の表現の工夫を考えて読み取り、要点を書く。
四 学 年	内容の中心点をはっきりさせて表現し理解する。	① 段落関係をおさえ、文章の中心的事柄を押さえさせる。 ② 作業的な活動を取り入れる。 ③ 問題意識を高め、読み解く喜びをさせる。 ④ 理解のための工夫をさせる。	・「読む↔書く↔話し合う」活動を多様に組み合わせる。 ・一人読み・個別学習・国語辞典の活用 ・全文・部分視写・書き込み
五 学 年	主題や要旨をはっきりさせて表現し理解する。	① 文書の要旨をとらえさせる。 ② 学習の過程に、自らつくりだす活動をさせる。 ③ 学習記録の自己修整をさせる。 (自己評価の機能) ④ 学ぼうとする意欲を持ち続けさせる。 (問題意識・課題意識)	・筆者のものの見方・考え方・感じ方をとらえまとめる。 ・表現活動を取り入れる。 ・書き加えや書き直しをし、よりよい学習記録に整理する。

六 学 年	<p>目的 や内容 にふさ わしい 表現を それに 応じて 理解す る。</p>	<p>① 目的に応じた読み取りをさせる。 ② レトリックへの着目をさせる。 ・何が書かれているか。(情報内容) ・どのように書かれているか。 (筆者の表現上の工夫) ③ 事象と意見・感想などの区別をさせる。 ④ 学習方法のイメージをもたせる。 ⑤ 期待感・必要感を持って説明文を読み 進めるよう発展させる。</p>	<p>・情報を自分のものとしてとらえ まとめる。 ・自発的な調べ読みに発展させ、 記録したり発表したりする。 ・筆者のものの見方や考え方・生 き方について、自分の考え方を まとめはっきりする。</p>
-------------	--	---	--

<説明文の読解>

ア 説明文の読解技能

- ・ものごとについての知識や情報を得ること。
- ・それらによって物の考え方、生き方を変えること。
- ・さらには実際の行動・実践に表すことをめざす。

- ① 文章の構成をとらえる。(要旨・要点)
- ② 筆者の意図を知る。

イ 説明文の読解過程例(書く活動を取り入れた読みの過程例)

読 解 過 程	読むことの例	書くことの例
① 全文の 通読	<ul style="list-style-type: none"> ・黙読、音読、範読。 ・要旨を予想する。 ・課題をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初発の感想を書く ・題名について書く ・新出漢字、意味調べ ・学習問題、学習計画 ・語句に線をする ・視写する
② 内容の 精査探究	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成をとらえる。 ・段落ごとの要点をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・序論・本論・結論 ・中心語句・重要語句 ・形式・意味・中心段落 ・指示語・接続語・文末
③ 要旨を とらえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・段落相互の関係 ・要旨をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文図を書く ・要旨を書く
④ 表現の 巧みさや 個性的表 現を味わ う。	<ul style="list-style-type: none"> ・視写又は音読によって好きな表現やユニークな表現を味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読、朗読 ・文型、語句 ・すぐれた表現
⑤ 感想な どを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者あての手紙、質問、「自分だったら…」の意見や感想などを書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・形式段階に番号をつける ・小見出しを書く ・重要語句や文を書き抜く ・行間に書きたす ・要点を書く
	<ul style="list-style-type: none"> ・意見や感想をもつ ・学習内容や学習方法のたしかめ ・自己評価・相互評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初発の感想を書く ・題名について書く ・新出漢字、意味調べ ・学習問題、学習計画 ・語句に線をする ・視写する
	<ul style="list-style-type: none"> ・形式段階に番号をつける ・小見出しを書く ・重要語句や文を書き抜く ・行間に書きたす ・要点を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・文図を書く ・要旨を書く
	<ul style="list-style-type: none"> ・音読、朗読 ・文型、語句 ・すぐれた表現 	<ul style="list-style-type: none"> ・視写する ・短文づくり ・文型、語句などの練習
	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者あての手紙、質問、「自分だったら…」の意見や感想などを書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者に手紙を書く ・意見や感想を書く ・学習の反省を書く

(3) 書くのさまざまな機能から取り入れる書く活動

<書くことを取り入れた授業の留意点>

- ア 書くことに学習上の必然性と必要性がある。
 - ・何のために、何を、いつ、どのように書かせるのか。計画性がなくてはならない。
- イ 書くための意欲をもたせる。
 - ・一人ひとりの子どもが、自分のしていることがわかる。
- ウ 書くための技能を身につけさせる。
 - ・自分の言いたいことが上手に文章に書けるための技能を、くり返し訓練して身につけるようにしなければならない。
- エ 書くためのスピードをつけさせる。
 - ・美しく、正確に文字を書く力も大切であるが、速く書く力もつけたい。
 - ・速く書く力………1枚の原稿用紙を10分程度で書けるようにしたい。

<書くのさまざまな機能>

1 視 写

(1) 視写のメリット

- ① 文章に書き慣れ、速く書き写せるようになる。
- ② 文字やことばの使い方、記号、改行など表記に関する基礎を確実にすることができる。
- ③ 文章を視写することが、音読や黙読ではとどかない文章理解の道を開いてくれることは、多くの読書人の語るところである。
- ④ 表記についての慣れ、文章の理解、その理解に触発をうけて、表現への意欲をもつこともできる。
 - ・視写による学習は国語だけではない。子どもたちは視写に慣れるにしたがって、自宅や図書室で他教材の学習や遊びなどに関する資料を書き写すこともするようになる。

(2) 筆速を育てる

- ① 子どもたちの筆速を調べる。1, 2回やりクラスの平均筆速をとらえておく。

低学年	中学年	高学年
15～20字	20～25字	25～30字

- ・1分間30字書ける力は、書くことにはこと欠かない大人なみの筆力。
- ・1枚の原稿用紙は、10分程度で書けるようにしたい。

② 筆速指導の順序

- ・視写は常に、教師と子どもが同時進行で行う。
- ・教師は板書、子どもはノートに書く。
- ・教師はクラスの平均筆速でリードしていく。

- ・速い子には、ていねいに書くこと。遅い子には、多少の乱れはOKにしてなるべく教師から遅れないように、そして、ひたすら、全員がそろって書き上げることに集中させる。
- ・視写の時間は、低学年で5～7分、中高年で7～10分ぐらい。1単位時間内に普通1回、2回がよい。
- ・書き上げたら、2、3分調整の時間を設ける。乱れた文字を直させたり、遅れている子を待ってゆったりする。
- ・視写に慣れるにしたがって、教師は徐々にスピードをあげていく。

③ 板書の工夫

- ・文章の構成を知るために、文章を分析して、行や語句の並べ方を工夫させる。
- ・筆者の意図、文章の理解を容易にするために、改行書きを工夫してみる。

④ 教師の視写教材法 → 教材研究に取り入れる。

- ・視写して読む。
- ・指導すべき事項・事柄を書き込んだり、資料を書きとめたりする。

2 聴 写

- ・人の話、人の読声を聞いてそれを書き取る聴写は、難度の高い書くこと。

- ① 注意を集中し、相手のことばを理解して、聞き取る。
- ② その理解にもとづき仮名、漢字その他どんな文字を使うか即時の判断が要求される。
- ③ 相手の話や、読声に遅れないために、暫時ことばを意識に停留させ、それを書きとめる筆速が求められる。

低 学 年……教師の読み聞かせによる聴写から始める。

高 学 年……授業中友人の発言をメモすること。

いろいろな部会での連絡事項を書き取る。

テレビやラジオの放送の聞き書きする。

(聴写の技術を指導)

- ・ずるずると書き流しにせず、しばらく聞いて、話にまとまりをつけること。
- ・そのまとまりを簡条書きにすること。
- ・いくつかの簡条書きをまとめて小見出しをつけること。

3 筆 答

- ・書いて答えること。
 - ・発問に対する応答を筆答にする。
- ① 書くという作業では、時間にゆとりがあり、即答を迫られるという抑圧が軽くなる。
 - ② 書くという作業には、必然的に思考が随伴してくる。
 - ③ 挙手一指名以前の学習なので、全員を集中させることが容易。
 - ④ 筆答の仕方に慣れてくると、口頭のそれより質のいい多彩な応答が得られる。
 - ⑤ 応答は書かれているので、それを発表する抵抗は少なく、その応答を比べたり、評価し合うこともたやすい。

4 書抜き

- ・古くから行われてきた読書技術

5 書込み

- ・視写のノートを使うとよい。
 - ・書込みの内容
- ① 読めない漢字を調べてルビをつけ、側に、字義（語意）あるいは、同義・同類語などを書き込む。難語句についても同じ。
 - ② 読みのねらいに即し、重要語句、時、所、登場人物、主要な事から、感銘をうけた箇所、発問に対する応答の内容になる部分などにサイドラインを引く。
 - ③ 子ども自身の独自の解釈や想像を書込む。（発言のメモにする）
 - ④ 読みながら得た、直感的、即時的な寸感、寸評を書込む。（メモ）
 - ⑤ 読みながら考えた疑問、質問、意見などを欄外に書出す。（メモ）
 - ⑥ 視写の部分あるいは、前後の段階に「小見出し」を付けてみる。

6 書足し

- ・読む活動……「読足し」「読広げ」



- ・書く活動……「書足し」「書広げ」

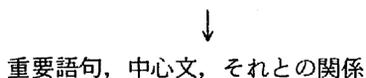
- (1) 題名におけることばの省略
- (2) 会話におけることばの省略
- (3) 登場人物の独語を書足して読む
- (4) 主語、述語の省略
- (5) 詩歌における諸種の省略

7 書替え

- ・1つの教材文を学習する何時間かの過程で、部分の書替えする。
 - ・1つの作品を通して書き替える。
- 例 説明文教材—伝達文、解説文などへ

8 書きまとめ

- ・読みとったことをまとめる。
- ① 読み手の主観を交えず、記述されていることを、コンパクトに集約する。
 - ② 読み取ったことを読み手の立場で、感想や意見の形にまとめる。



9 寸感・寸評

- ・子どもたちのフリーな読みの中から、生まれてくる素朴なもの。

10 図表・図式・絵画化

- ① 図式は複雑でないこと。
- ② 教師が考えた図式を子どもに押しつけないこと。
- ③ 子どもの自由な発想による図式化が望ましい。ただし、全員をこの学習に取組ませるためには、手引指導が必要である。
- ④ 図式化は抽象化、統括・まとめ。低学年や下位の子どもには抵抗がある。そこで絵画化を混用するとよい。
- ⑤ 全文章の図式化はむずかしい。
 - ・行動地図
 - ・記録的文章を表にする

11 ワークシート

(1) ワークシートを使用した自力読みの指導

(メリット) ・学習内容が明確に示されるため、分かりやすい。

- ・読解の順序や方法が明確になる。
- ・学習の個別化が図れる。
- ・書くことにより、読解が確実になる。
- ・学習の跡が残るため、全体の読み深めに主体的に参加させられる。
- ・学習後の処理（評価等）がしやすい。

(デメリット) ・授業がパターン化しやすい。

- ・児童自ら課題を見つけようとしなくなる。
- ・理解の遅い児童は不十分な読み取りのまま、全体での読み深めに入りやすい。
- ・い。
- ・理解の速い児童は、時間を持てあましてしまう。

(2) 自力読みでワークシートを使用する場合

- ① できるだけ本文に即して読み取り、書く活動を取り入れる。
- ② ワークシートは学習活動のすべてに使うのではなく、予習学習として自分の考えをまとめておく過程で取り入れる。
- ③ 1種類のワークシートを全員に使わせるのではなく、児童の実態に応じて数種類準備し学習させる。

「書く」ことは、すべての言語学習を支え、これを確かにし豊かにするはたらきをもつものです。固定した「書く」ではなく、ことばの学習にもぐりこんで、さまざまに機能する「書くこと」にさせていきたいものである。

IV 授業実践

1 単元名 身の守り方をくらべて 「めだか」 (説明文)

2 単元について

3年生では、事例を挙げて内容を説明する文章や、課題を設定して一つ一つ解明していく文章を読むようになる。このような説明的な文章に興味や関心を持つのだろうか。とかく、文章の大事な内容を落として読んでしまう児童が多い。また、勝手な想像を加えて読んだり、自分の経験や興味をもとに独断的に読んだりする傾向も見られる。このようなことから、第3学年では、興味・関心を持続させながら叙述に即して文章の要点を読み取らせる指導が大事になる。第3学年で要点を理解させる指導をすることは、第4学年で段落意識をもたせ、第5学年で要旨を理解させる指導の大切な基礎になる。

本単元で取り上げた教材文「めだか」は、児童によく知られている魚で、日本で最小の魚であるめだかの生態を中心とした説明文である。「春の小川や池で楽しそうに泳いでいるめだかが、実はたくさんの敵から身を守ったり、自然の厳しさに耐えながら生きているのです。」という説明は、児童に驚きをもたらすであろう。この教材文を読むことによって、自然や生物界の不思議さや法則について第3学年なりにとらえさせたい。そして、教材文の内容に触発されることによって、動物や植物の本を進んで読むようにさせたい。

教材文の文章構成は、大きく三つの段落に分かれている。「話題提示の段落」「説明の段落」「まとめ」である。それぞれの段落が内容的にはっきりしており、めだかの生態の知られざる側面の事柄が順序に沿って論を展開していることから、文章の叙述に即して要点を読み取らせるのに適した教材文である。

また、授業においては学習過程の中で書く活動を取り入れた読みの指導をすることにより、一人ひとりの子が自分のイメージや思考を広げたり、深めたりできるよう確かに読みとらせ豊かな読みの力をつけたい。

さらに本校の教育目標「心豊かな人間の育成」をめざしたい。

3 単元の目標

- (1) 叙述に即して正確に内容をよみとり、要点を読み取ることができるようにする。
- (2) 進んでいるいろいろな読み物を読むことができるようにする。

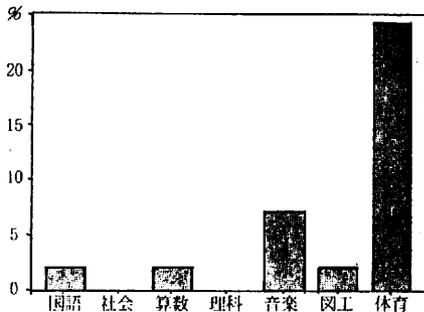
4 指導計画 (9時扱い)

第一次	単元名をもとに内容について話し合ったり、単元構成を理解したりする。……………	1
第二次	「めだか」を通読し、初めて知ったことをまとめる。……………	2
第三次	「めだか」を段落ごとに詳しく読み取る。……………	5
	・「めだか」の生態や外敵について理解する。……………	(1)
	・「めだか」の身の守り方を理解する。……………	(1, 2)
	・「めだか」の体に備わっている特別な仕組みを理解する。……………	(1, 2)
第四次	学習のまとめをする。……………	1

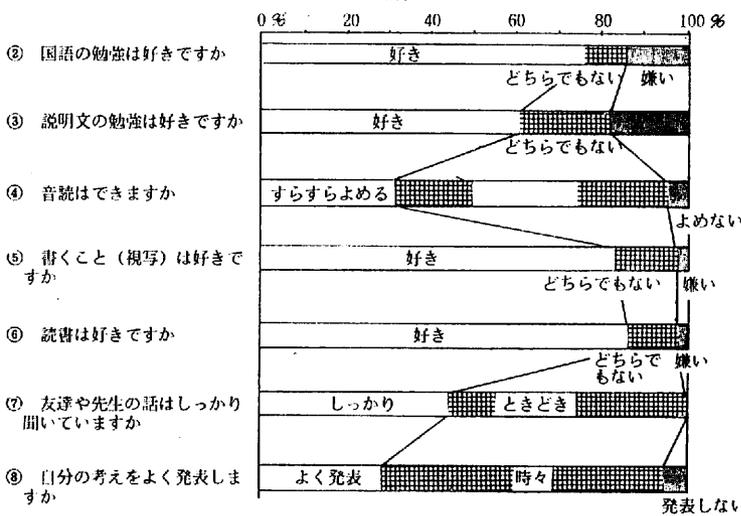
5 児童の実態 (神森小学校3年3組37名 5月)

(1) 児童のアンケートより

① とくいな(すきな)勉強は、なんですか。



- 体育と音楽の好きな3年生らしい元気な子どもたちである。
- 社会と理科は3年生になって初めての教科であり、まだ学習内容がわかってないのであろう。



- 国語の学習は好きな方であるが説明文の学習は減っている。なぜかまで聞くとよかった。
- 読みは自信がないようであり、そのことが読解力に影響があるようだ。
- 書くことは好んでいるようで安心したが作文は嫌いなようであり指導が必要。

(2) 読書量 (2学年のときの学校図書室からの本を借りた状況)

平成4年5月～平成5年3月

借りた冊数	在籍	平均
2835	128人	25.31冊

- 読書は好きなようであるが図書室の利用は少ないので指導したい。
- 聞くことは学習の始まりであり、指導したい。
- 発表は少ないようで全体的に活発でないようなので学習形態などの工夫が必要である。

(3) 作文力をみる (約20分～30分)

• 題材は運動会で使った「かぶと」の作り方を書いてもらった。

結果	人数	割合 (%)
① 書き上げた子	24人	65%
② 原稿用紙枚数(字数) 約3枚	1人	3%
	2枚	12人 (32%)
	1枚	24人 (65%)
③ 指示語を使った子	13人	35%
④ 接続語を使った子	30人	81%

- 作文力は個人差がおおきい。
- 指示語はあまり作っていないが、接続語は「はじめに」「まず」などを使って文章を続けているが、適切でない使い方もある。
- 修飾語もたくさん使い表現力の豊かな子もいる。しかし、ほとんどの子は語彙が少ない。
- 説明文の学習を作文(書く活動)に生かしたいものである。

(4) 診断テストより (正答率)

① 既習学習 (2年) の診断 他社の教科書の教材を使って 「あきあかねの一生」	② 未習学習 (3年) の診断 他社の教科書の教材を使って 「ヤドカリの引っこし」
71 %	49 %

- ・「叙述に即して読み取る」は80%でよいが、「事柄の順序がわかる」41%であり指導が必要である。
- ・未習内容でありやはり低い正答率である。
- 指示語・接続語、要点・要旨の指導が必要である。これからの学習で確かに読み取れるよう指導したい。

これらの実態から、3年生も達成度テストの結果と同じようなことがいえる。

説明文指導で大事な要点指導の要であるこの学年は重要である。また、何事にも興味・関心のある3年生のこの時期に、確かに読みとらせ、それをさらに豊かに発展させていくことは可能であると考えられる。そこで、説明文指導の工夫を試みていきたい。

6 本単元における豊かに読み取らせる説明文指導の手だて

① 課題をもたせる

- ・感想や疑問、本文などから要旨に迫る課題を設定し、その解決のための小課題を見つけ、課題に沿った学習を進め、要旨に迫る読みをさせたい。

② ノートの工夫

- ・説明文ノートをつくり、1年分閉じさせていく。そうすることによって学習のフィードバックができるようになる。
- ・単元や教材によりノートの使い方をかえる。このノート指導は自ら学ぶ学習の仕方を身につけさせることにつなげたい。

例 「めだか」では、見開きにし、上は視写 (全文) させ下は読み取りにした。

- ・ノートの工夫について学習しているので子どもたちにその都度考えさせたい。

③ 書く活動をいろいろ取り入れる

- ・全文視写・部分視写をさせ、読み取りや表現に気付かせたりする。
- ・ワークシートを活用し、読みを確実にしたり深めたりする。ただし、その内容や量などに気をつけて作成したい。ワークシートはノートに貼り、学習の過程がわかるようにする。
- ・吹き出しを入れたり、書き直したりして、いろいろな「書く」活動を取り入れる。

④ 学習を印象づける

- * 文章からの読み取りが大切であるが、その手助けとして位置づけたい。
- ・教育機器の利用 (OHP, ビデオ, カセット等)
- ・さし絵……拡大したもの、描いたものなど
- ・実物・観察・実験、本・雑誌・新聞など

⑤ 学習形態の工夫

- ・学習活動も考えながら、個が生かせる形態を考える。
- 「めだか」では、説明文指導の最初なので一斉指導にする。
- 次の教材「魚の身の守り方」では、グループ学習を取り入れたい。

⑥ 板書の工夫

- ・ 学習課題を掲示し、それを解決していく児童の思考を写し出すようにする。
- ・ カードの色分けなどをし、語句や文のつながりを考えさせる。
「めだか」では、指示語・接続語・課題を色分け。

⑦ 読書につなげる

- ・ 「めだか」についてもっと知りたいことを調べてみよう。他の魚の身の守り方を調べてみよう。など

⑧ 評 価

- ・ 自己評価をさせていく。（評価表、ノート、テストなど）
「めだか」では、ノートを中心にみる。

* 教師……教材研究を深めることが、子どもたちを豊かに読み取らせることができると考える。

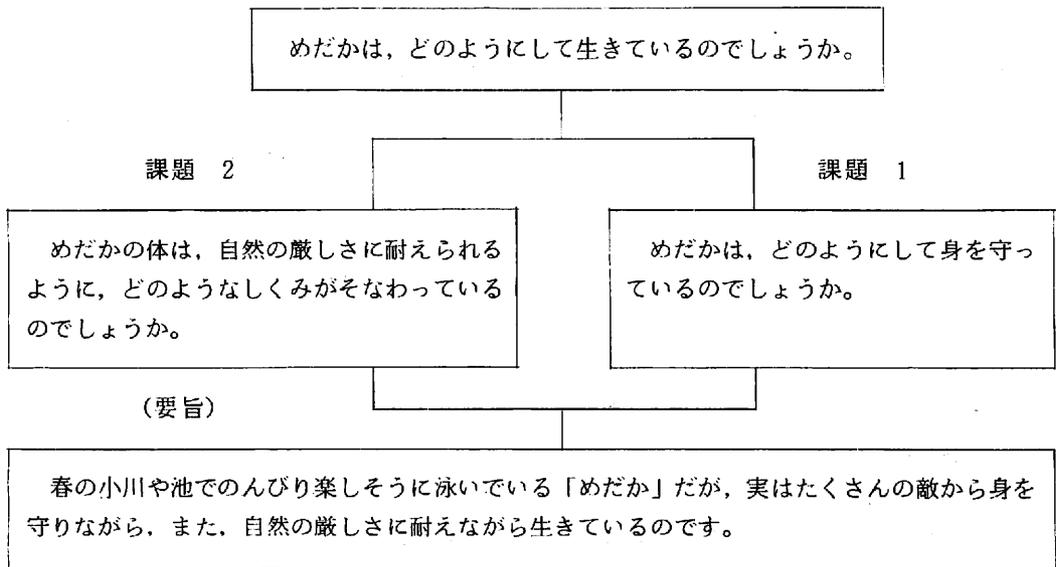
7 おもな指導事項

- ・ 文章の要点を正しく読み取ること。（理エ）
- ・ 叙述に即して内容を正しく読み取ること。（理オ）
- ・ 自分の立場から大事だと思うことを落とさないで文章を読むこと。（理ク）
- ・ 必要な事柄を整理して書くこと。（表ウ）
- ・ 読んだ内容から素材を見つけて書くこと。（表ク）
語句には性質の上で類別があることに気づくこと。（言（1）エイ）
文の中の修飾と被修飾との関係を理解すること。（言（2）オア）

8 教材研究

(1) 指導的研究

要旨を支える学習課題の設定



(2) 言語表現形式 (教材分析) — 「めだか」 教出上 3 年 —

講 成	要 点	こ と ば		
		重 要 語 句	指 示 語 ・ 接 続 語	文 末
一、話題提示	① 童 謡 「めだかの学校」	めだか		
	② めだかは日本でもっとも小さい魚である。	もっとも小さい魚		～です。 ～しかなりません。
二、課題 1 (身を守る)	③ めだかは、いつもたくさん のてきにねらわれている。	たくさん のてき	・～が	～ます。 ～です。
	④ めだかは、てきからどのよう に身を守っているのか。	身を守る	・では ・そのようなとき ・どのようにして	～のでしょ うか。
	⑤ 水面近くでくらし身を守る。	水 面 身を守る	・まず第一に	～ます。 ～のです。
	⑥ すばやく泳いで身を守る。	すばやく 身を守る	・第二に	～ます。 ～のです。
	⑦ そこにもぐって行って水を にごらせ、身を守る。	もぐる にごらせる 身を守る	・第三に	～ます。 ～のです。
	⑧ 何十びきもあつまって泳ぐ ことにより、身を守る。	あつまる 身を守る	・第四に ・すると ・その間に	～ます。
	⑨ めだかの体には、しぜんの きびしさにたえられるとくべ つなしくみがそなわっている。	めだかの体 とくべつなしくみ	・こうして	～ません。 ～のです。
三、課題 2 (とくべつなしくみ)	⑩ 夏、雨が降らないと「ふな」 や「こい」は死んでしまう。	死 ぬ	・～と	～ます。
	⑪ めだかは、小さな水たまり でも、水温が上がってもたえ ることができる。	めだかの体 たえる	・でも ・～が	～ます。 ～ません。
	⑫ 真水でくらす魚は海水では 生きることができず、海にす む魚は真水では死ぬ。	真 水 海 水 死 ぬ	・また ・～と	～ます。 ～ません。
	⑬ めだかの体は、海水にもた えられるようにできている。	海 水 たえる	・しかし ・やがて	～ます。 ～のです。
四、まとめ	⑭ めだかは、いろいろなほう ほうでてきから身を守り、し ぜんのきびしさにたえながら 生きている。	身を守る たえる 生きる	・しかし	～ません。 ～のです。

4
話題
提示

- (1) 1段落～3段落まで、大事なことを落とさずに読むことができる。
- ① 「めだか」の学校
 - ② めだかは日本で最も小さい魚
 - ③ めだかは、いつもたぐさんの敵にねらわれている。
- (2) 初めて分かったこと、思ったことを書く。

- ・「めだかの学校」の歌をOHPでさし絵や歌詞を投影しながら歌わせる。
- ・ワークシートに各段落の要点、読み取りを書かせる。
- ・ノートの上夫をさせ、吹き出しを入れたり書き直し等をする。

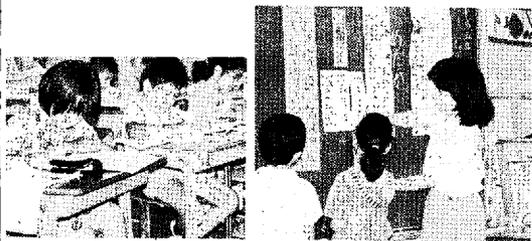
(一) めだか
① めだかの学校は川の
そばにあり、水がきれいで
おいしい。たぐさんや
みんなが泳ぎまわっている。
② 春になると、小川や
池の水面近くに、小川や
かがすがたをあらわし
ます。めだかは日本
にすむ魚の中では、最も
小さい魚です。
③ めだかの体長は、三、四センチ

① めだかの学校は、たぐさんとみんなが泳ぎまわっている。
② めだかは、日本にすむ魚の中で、最も小さい魚です。
③ めだかの体長は、三、四センチです。

5
・
6
課題
1

- (1) 4段落～8段落の要点を読み取る。
- めだかは、どのようにして身を守っているのでしょうか。

- ・「めだかの学校」「めだかの兄妹」を歌う。
- ・ワークシートに各段落の要点、読み取りを書かせる。



(読み取り)

身を守る

- 第1 水面近くでくらす
- 第2 すばやく泳ぐ
- 第3 水をにこらせる
- 第4 あつまって泳ぐ

- (2) 表現の工夫に気づく。

① 第三に、小川や池のそばに、たぐさんやみんなが泳ぎまわっている。
② めだかは、日本にすむ魚の中で、最も小さい魚です。
③ めだかの体長は、三、四センチです。

① めだかの学校は、たぐさんとみんなが泳ぎまわっている。
② めだかは、日本にすむ魚の中で、最も小さい魚です。
③ めだかの体長は、三、四センチです。

自力 ←
(書き直し書き加えなどをし評価する。)

← 共同 ← 自力
(友だちの考えを知る) (答える)
・最初の自力読みでは要点を簡条書きに書いていたが、読み取った後は1つの文にまとめることができた。

9
ま
と
め

(1) 14段落を読み、学習のまとめをする。(要旨)

めだかは、どのような
にして生きているので
しょうか。

• めだかは、いろいろな方法で敵から身を守り、自然のきびしさにたえながら生きている。

(2) めだかに、手紙を書く。

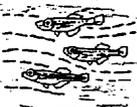
(3) めだかについて、調べてみたいことを話し合う。

• ノートにまとめさせる。(要旨)

			るにやうめ	
			のをり法た	
			てみ目でか	
			すなせは	
			かんで	
			るのま	
			生きから	
			まひらい	
			てし身ろ	
			いこそち	

めだかさん、どうして水の中に
とまる頭が重いのか、
体が小さいのによく泳いでいるのか、
目をつぶって泳いでいるのか、
泳ぐの速いのか、
めだかにも、めだかに話した
い、めだかになんて話しているのか、
な所をたんけんしてみたい。
そして、いつか身がまと、いっしょに
泳ぎたいです。
そんなことができるかという件、
わたしも、めだかさんとお話さ
したいよ。
いちばん小さいのによくかっぱて
いるんだね。
わたしも、かんはるかな
かわいてきたよ。

ごきうゴリ



しーへいこ
めだかのオス、メスはどうやって見わけるか。
めだかはなにをたべるか。
めだかのたまごはどれくらい大きくなるのか。
めだかは、おんな年に産むのか。
めだかはどうして小さいのか。
めだかは何でたべられるのか。
めだかは何で泳ぐのか。
めだかは何でたまごを産むのか。
めだかは何で泳ぐのか。

授
業
後
の
様
子

(1) 自分で本で調べて書く。
(2) 次の教材「魚の身の守り方」についての参考になる本をさがしておく。

• 読書につながる「めだか」に関する本を紹介する。
• 「めだか博士になろう」多く調べた子が博士になる。博士号の賞状を与える。

メダカのエサは
イトダズとしてよく
食やるそうだ。
めだかのたまごはど
りほどの大きさにまで大き
く育つ。
生まれたばかりのメダカ
は、おぼろげに泳いでいると、
2日目になると、おなか
まわりのくぼきが出て、
色がつく。
1か月たると、体の長さも1
センチほどになる。

V 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 書く活動を取り入れることにより、児童が学習に集中し個々の児童の学習の個別化が図れた。

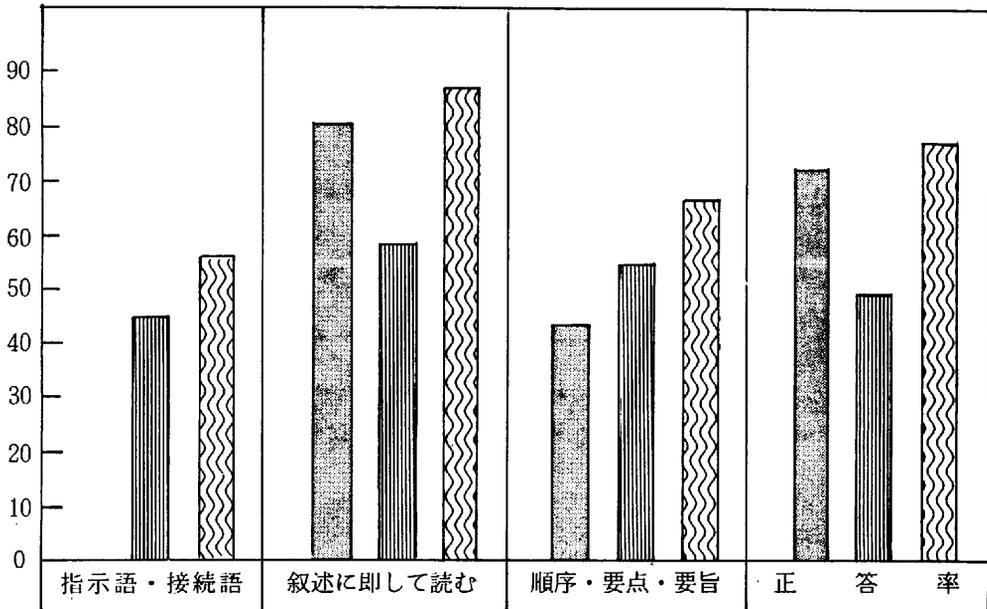
- ・ワークシートやノートに書くことにより、文章を叙述に即して読み取ろうとする態度や思考をはたらかせて自力で読み取った要点を共同思考の場で評価し、書き加えたり書き替えたりする態度が見られるようになった。
- ・全文視写の段階では、書くことの大変さと書き終えた充実感を持ったようで、その両面を持たせることは学習において大切だと考える。視写することで全文把握ができ身近に感ずるようになったようだ。
- ・読み取ったことから、そのことへの感想などを書いたりすることにより、イメージを広げたりもっと知りたいという意欲から読書へと豊かな読みから発展的な読みができた。

(2) 表現の工夫に気がつく子が増えた。

- ・身の守り方について工夫して書いている。
(分かりやすい、読みやすい、くわしく書いてある)
- ・つなぎ言葉を使っている。(順序よく書いてある)
- ・一字あいている。(段落・まとまりがある)
- ・わけ・理由が書いている。

(3) 児童の実態の変容 (診断テスト)

■ 2年「あきあかねの一生」での診断
 ▨ 3年「ヤドカリのひっこし」での診断
 ▩ 3年「めだか」での診断



- ・3年教材未習「ヤドカリのひっこし」では正答率49%であったが、本教材「めだか」では77%の正答率になった。叙述に即して読み取るには85%で理解されたことが分かったが、指示語・接続語についてはまだ低い正答率である。

全体的に今後の指導が必要なようである。

2 今後の課題

- (1) 書く活動は、時間がかかる実態なので児童の筆速力をつけていきたい。
- (2) 書く活動の機能で「何を、いつ、どこで」使うのか、考えていかなければならない。
- (3) ノートの工夫、ワークシートの工夫や個別化など考え、確かに読み取らせていきたい。
- (4) 学習形態を考え、個を生かす児童の活動をふやしていきたい。
- (5) 新しい学力観に基づいた国語科の評価をどのようにするのか検討していきたい。
- (6) 豊かに読み取る一主体的に―自己教育力の育成を考えて授業実践をしていきたい。

<主な参考・引用文献>

豊かな読みと確かな読み	石田佐久馬 編	東洋館出版社
書くことを生かした説明文の授業	石田佐久馬 編	東洋館出版社
説明文教材による授業の進め方・深め方	石田佐久馬 編	東洋館出版社
新しい学力観に立つ説明文の授業はいま	石田佐久馬 著	東洋館出版社
第三の書く―読むために書き 書くために読む―	肯木 幹勇 著	国土社
国語勉強好きにする教え方 ―書いて読む―	大越 和孝 著	国土社
総論・評価と評価基準	熱海 則夫 高岡 浩二 指導・監修 清水 静海	国土社
国語教師用指導書 3年上	教育出版 編	教育出版
新しい国語科よい授業の条件	倉沢 栄吉他著	東洋館出版社
解説国語単元学習	倉沢 栄吉 著	東洋館出版社
説明文教材指導実践事典	藤原 宏 著	教育出版
小学校国語指導資料 ―学習指導の改善―	文部省	東洋館出版社
国語科の実践動向 I	小森 茂 編	国土社
科学のアルバム 93 ―メダカのくらし―	草野 慎二 著	あかね書房
科学のアルバム 15 ―海のさかな―	館石 昭 著	あかね書房